

『ガープの世界』の映画的技法についての覚書¹

伊 東 保

映画の空間モンタージュの技法が小説に効果的に使用された例として、『現代小説における意識の流れ』の中でハンフリー (Humphrey) は、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*, 1925) の、宣伝用飛行機によって結び付けられる一連の場面をを挙げて(54-56)、この技法によって、一度もお互いに顔を合わせることもないクラリッサ (Clarissa) とセプティマス (Septimus) が結びつけられているとしている。これに加えて、二人がタイヤのパンクで立ち往生した謎の車をそれぞれ目撃する場面も並列されているが、モダンライブラリー版への自序 (1928) を見ないで、セプティマスが主人公の分身であることに気付いた人はあまりいなかったかもしれない。これに対し、マルレーン・ゴリス監督 (Marleen Gorris) の映画版 (1977) では、冒頭クラリッサが花を買いに出かける場面の前に、原作にはないセプティマスの戦場場面が挿入されていて、二人の関係が判りやすくなっている。

時間モンタージュもしくはカットバックが『ダロウェイ夫人』よりも効果的に用いられているのは『灯台へ』(*To the Lighthouse*) の第三部である。灯台に向かう舟の場面と絵を描く場面が交互に描写されることによって、両者の間の類似性が見えてくる。船の上で息子は母親の影響から脱し、父と和解し、画家はラムジー夫人 (Ramsay) の呪縛から開放され、ラムジー氏とも和解する。二つの行為が平行して提示されることによって、航海も絵も単なる日常的な行為でなく、象徴的に見えてくるのである。

ジョン・アーヴィング (John Irving) の『ガープの世界』(*The World According to Garp*, 1976) にも、父との同一化、母との関係の主題があり、

カットバックの技法がうまく使用されている場面がある。²

ミルトン (Milton) との関係を清算するようと言いおいてガーブが子供たちを連れて映画館へ行っている間、ヘレン (Helen) は家の前庭でミルトンを必死に説得しようとする。この間、ガーブの場面とヘレンの場面が交互に描かれ、最後に彼女がミルトンをビュイックの中でいかせようとしている短い段落の後に、ガーブがヘレンのボルボで家の前の坂を「飛行機が離陸する時のような」(374) 感覚を味わいながら猛スピードで上って来る様子が描かれている。この視点の切替えは、一見、単に二台の車が激突するまでのスリルとサスペンスを盛上げるための技巧であるように思われる。しかし、よく見ると、二つの場面には共通するイメージが使われている。発射間近なミルトンは「あたかも三トンのビュイックが突然地面を離れるかのように」(373、傍点伊東) 車のハンドルを掴んでいるのである。

ガーブの離陸は父親との同化願望を意味するが³、同時にミルトンの離陸、つまり、射精直前の体が浮く感じ (ミルトンは腿の内側の筋肉を緊張させ、尻を突き出している) もモンタージュの技法によって重ね合わされている。二台の車の衝突の結果、ペニスを噛み切られるのはミルトンであるが、ガーブもこの時、舌 (=言葉=ペン) を噛み切り、十二針縫う。ミルトンを介してガーブはヘレンにレイプされるのである。

この小説が女による男の去勢を主題にしていることは、第一章で、ジェニー (Jenny) の同僚の看護婦の間で交わされるピーター・ベント (the Peter Bent) と呼び習わされている市内の病院についての冗句としてさりげなくほめかされている。苦痛で顔を紫にして、言葉を発するのがやっとの男が病院病院と喚くので、タクシーの運転手が、一番近いピーター・ベントかと訊くと、「曲がった (bent) どころじゃない…モリーのやつ噛み切りゃがったみたいなんだ。」(7)と答えるという、病院の名前と「ピーター」の隠語⁴で遊ぶ冗談である。この後「ピーター」の語を繋ぎにして妊娠、性病、性病治療法と話が続いた後に、ジェニーが「ピーター」から身を護る

ために持ち歩いているメスで痴漢に切りつけて血まみれにさせる挿話があり、この二つの挿話を併せると、ジェニーのレイプは予告されていると云える。

ミルトンに会う前にヘレンの運転しているボルボのギアシャフトのノブがはずれて手首に血が出る。ノブは前から何度もはずれてはいたが、夫ではなく「彼女が運転している時に必ずはずれた」(316)。これもミルトンの去勢を予告するものである。

血とペニスと舌は、ヘレンがミルトンの物を嘔み切った時、彼女の口の中で一緒になる。最初彼女は口の中の血まみれの物は舌だと思うが、そうではなかった。しかし、ミルトンのペニスを嘔み切ることが、場面の重ね合わせによって、ガーブの舌を嘔み切ることに繋がっているのである。

ミルトンとガーブの玉突き去勢は、そもそものレイプ、つまり、母ジェニー・フィールズによる飛行機乗りの父ガーブのレイプとも重なる。彼はジェニーの胎内に発射した後、唯一残されていたガーブという言葉もなくなった。小説のクライマックスのこの衝突でガーブは父の最期を追体験したことになるのである。

引証文献

Humphrey, Robert, *Stream of Consciousness in the Modern Novel*. Berkeley: University of California Press, 1954.

Irving, John. *The World According to Garp*. New York: Pocket Books, 1979.

Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. London: The Hogarth Press, 1963.

註

- 1 これは拙論「ナイチンゲールの凌辱：『ガーブの世界』の世界」『英語青年』2000年9月号、研究社、30-33の補遺である。
- 2 アーヴィングはウルフをかなり意識していたと思われる。ガーブの妻で英文学の教師であるヘレンは「視点を中心とした現代小説の語りの技法の発展と洗練に興味があり」(312)、教え子のミルトンとの最初の会見では、彼がウルフの『波』(*The Waves*)と『ジェイコブの部屋』(*Jacob's Room*)について論ずるのを聞いて、『灯台へ』と『ダロウェイ夫人』についてはよく解ってないと判断している。後に彼女が書く論文はウルフとコンラッド(Conrad)を扱うものである。『ホテル・ニューハンプシャー』(*The Hotel New Hampshire*, 1981)にいたっては、『燈台へ』と構成が似ており、もともとのホテル・ニューハンプシャーとウィーンのホテルとの関係は『灯台へ』の第一部と第三部との関係を、また、ウィーンへの移動中に飛行機事故で死ぬ母親は第二部で亡くなるラムジー夫人を思わせ、娘の小説家リリーは同じ名を持つ画家を思い出させる。
- 3 「ナイチンゲールの凌辱：『ガーブの世界』の世界」参照。
- 4 Peter(s) pence または Peter(s) penny (教皇への献金) という単語からできた隠語ではないかと考えられる。

A Note on a Cinematic Device in *The World According to Garp*

ITO Tamotsu

A cinematic device “cutback” is used very effectively in *The World According to Garp*. While Milton is sucked by Helen, he grips the steering wheel, “as if he expected the three-ton Buick to suddenly leave the ground. (373)”, that is, he is about to ejaculate. Just after this paragraph, Garp “hit the bottom of his driveway (373)” and coasts uphill in his wife’s Volvo, which “was like that moment when you feel an airplane lift off the runway (374)”. When the Volvo smashes into the Buick, Helen bites off Milton’s penis, which she thinks at first is her tongue, but actually it is Garp who mangles his tongue. In Feminist criticism Penis is Pen. Because of the device of cutback, we can see that she indirectly bites off Garp’s penis and tongue (=pen). This castration is superimposed over his mother Jenny Fields’ straddling his dying father Garp, which deprives him of his last word “Garp”.